

『ホトトギスになった男』

その昔、国下、八田、千野の山境に、二人の兄弟がいました。弟は、たいへん兄思いの人でした。しかし、兄は、たいそう疑い深い人でした。兄は、身体が弱く、いつも家に引きこもっていました。



兄は、山へ行った弟のことをふと考えました。

「今ごろ、弟は、山できつとうまいものを食べているに違いない。」

と、目を光らせ、ねたましく思っていました。一方、弟は、その頃、山でカーンカーンと木を切っていました。汗、びしょりになり、切り株に腰を下ろし一服をしていました。

「一生懸命働いたあとの一服は、いいものだ。今ごろ、兄さんは、家でひとりさみしく、帰りをまっているだろうな。」

「どれ、なにか、うまいものでも持って行ってやろう。」

と、弟は、大きな山芋を探して、兄への土産にしました。

しかし、兄は、弟のやさしい気持ちなど少しも知りません。一人で山芋を食べてしまうと、また、考えました。

「おれに、こんなうまいものをくれるのだから、弟は、もつとうまいものを食べているに違いない。」

ある日、とうとう、兄は、弟を殺してしまいました。ところが、弟の腹の中は、粟やひえでいっぱいでした。兄は、初めて弟のやさしさを知りました。そして、あまりの恐ろしさに、その場で『ホトトギス』になってしまいました。

それから、今も、毎日、夕方には

「掘って、煮て、食わそう。」

「掘って…、煮て…、食わそう…。」

と泣き悲しんでおりますとな。

(国下町 伝承)